

# 虚偽の分水嶺

授業再開か拒否か

を解体せよ！

## オ四インタナシヨナル東教大細胞

教育大において、当初「筑波移転か否か」としてあつた教授法内部の対立は、現在大学指置法の成立によつて、「大学措置法適用から教育大廃校、和大學設立」か、「教育大として移転」かという設定となりつて文学部教授法につきつけられてい。自分の展望の破壊に直面した教授法は、これまでの「ツーキヤンパス論」を放り出し、「終戦後運動に対するもの提唱を行ないつつ、授業再開を展望し、宮島秀推進派は二の柱に乗じて一挙に文教授法に対する圧力を強めんとしている。

一方学生は、大学立法による「移転か廃校か」というその中で、何等自らの展望を持ち得ないまま、「授業を受けるのか否か」という虚偽の分水嶺の上に投げ出されていると言えよう。教員による所謂「大學改革」や、常に「授業を受ける学生の権利」等を云々するスターリニストに対する大衆の反発がスルジョアジーとスターリニスト官僚に対するスロレタリヤーの階級的独立の為の斗争として意識化され、政治的に組織されるのではなく、更に無展望な状況に落しきまれようとしている。だが、この状況が突き出した危機的性格が存するのである。

大學とは、スルジョアジーによって「スルジョア批判」の自由が与えられた場であり、戦後にあつては、それは「戦後民主主義」によつて保障された。しかしながら、大學に於ける自己の判断の範囲、スルジョアジーの自己教育とスロレタリート教育の場として大學を再生する展望を、まことに意味したのである。即ち、彼らの大学立法に対する抗議や、「大學改革」は、「戦後民主主義」によって保証され隔離された大學とその中ににおける自己に対する鄉愁のあらわれにすぎない。それこそ

「戦後民主主義」によつて保障された専权から既にはみ出してしまつた学生が、スターリニストの所謂「教師と學生の統一戦線」を支持できない族類の性格もまたかかる状況の一層の進展に対する直感なのである。教育大文教授会の当初からの移転反対と並んで「教師と學生の統一戦線」を支持できない族類と反対としてあつたのである。それに対して彼らの移転反対や改革に対する考え方が「間違つてゐる」とか「不十分である」とか云つてけても何も明きらかにならない。

学生の運動の出发点が、スルジョア社会における「スルジョア批判」の自由と「特權からしめ出された」という、それ自体では保守的なものであつたとしても、「戦後民主主義」によつて保障されてきた「権利からしめ出されること」によって、彼らは直ちに「成后民主主義」を客観的に犯え返す基盤を獲得する。しかも彼らは「反乱」を開始したとたんに、自分にとつて不満であつた「戦後民主主義」の檻の中に再び閉じ込めようとするスターリニスト官僚の存在と対立し、國家权力のみならず彼らとも暴力的に対する漠然とした不信・不満から出発した大衆の抗争は、かかる支配の构造そのものを破壊することなしには、現実の斗争が一步も進展しないという問題に直面するのである。

大衆がかかる奥での展望を求めている時、その間に答えることなく、「授業を拒否するか否か」とは、どうやら分水嶺を引くことは、斗争の水準を固定化するのみならず、大衆の意識性を解体し、分散化させるもの以外の何物でもない。

現在、様々な部分によつて「反対」が叫ばれていた大学指置法もまた、単に先に述べた如きスルジョアジーの行政上の必要な件ではなく、実はかかる大衆の意識性を、スルジョアジーにとって致命的となるまで成長し得い。（ウラへ続く）

### オ四インタナシヨナル政治小説

・三巻七号 「オ四インタナシヨナルの再建と日和見主義」

・三巻八号 「戦後スマーリンクス主義者の仕事」

・三巻九号

「大学運営臨時指置法とスルジョア政治」

うちにその核心に於て解体するためのものであった。戦後に於る日本帝国主義の復興は、スターリニスト官僚がプロレタリアートを小アルジヨアの政治「民主主義」のための斗争に动员することによつて階級として解体し、日帝がそれを自己の再建のエネルギーに転化することを通じてなされたのである。かかる敗北を経験したプロレタリアートは、六〇年安保に於て小アルジヨアの「民主主義」のための斗争にはついでゆえず、これに幻滅した小アルジヨアは、プロレタリアートは政治的に無能であると考へるようになつた。この故に、今日急進主義的小アルジヨアはプロレタリアートを輕蔑し、自己の革命性の幻想にひたつてゐるのである。

プロレタリアートはこうして完全に小アルジヨアの政治からしめ出されることによつて、遂に自己を独自に形成する条件を得たのである。七〇年を前にして、プロレタリアートのフルジヨア政治に対する沈黙は自らにとつて最も恐るべきものであることに気づいたフルジヨアジーは、再びプロレタリアートの闘争をブルジョア政者に、就中議会制民主主義にひきつけ、その方向で沈黙を破らせることによつてそれがプロレタリア革命の叫びとして破られることを阻止しようとしたのである。

大学法案の日辰に於る強行採決は、大学に於る学生の「斗いし」を恐れたが故ではない。プロレタリアートの独立しに登場がない限り、小アルの運動は彼らにとつて恐れるに足りないのである。それはまさに、プロレタリアートの意識性と組織性に於ける独立に対する攻撃としてあつたのである。この攻撃がどうのようは効果をあげにまは「なしくすしフアシズム」と云々我々の攻撃を恐れたフルジヨアジーの左なら大學法にのみわる我々にとつての問題は、七〇年に向つて、階級的政治的独立の課題に何をもつて应えるのかということであり、七〇年斗争の展望も、唯一なる点からのみ構成されるのである。

七〇年を前にしに現在、所謂「反戦派」の处置をめぐつての筋肉運動に於る杜民の流動化、即ち、糾評「左派」に於ける太田・宗樹一派とスターリニスト右派の「反戦派」排隊と、社民党和改派・江田派及び賄業的反共屋であるJMFSDにつながる民同方面派による「反戦派」育成の主張という一見「奇妙」な軸なだけ決して理解することができない。分裂の軸は人々のリニスト官僚によって強制されたものであることを直感したプロレタリアートの彼らに対する不信敵対の感情を利用することの中に自己の利益を見出す社会官僚の一部が、その手段として小アルジヨア急進主義者のスターリニスト官僚に対する主観的情態を利用しようとしているのである。

小アル急進主義者は、プロレタリアートのスターリニスト官僚に対する敵対を現時代の階級斗争の性格にみなれる核心的な問題として明らかにし、階級に戦後支配体制とその崩壊に向つての政治的武力を与え、階級として政治的に独立して組織することを通じて、その敵対を在野革命のエネルギーに転化することができる。単にできないのみならず、日本ブルラヨアジーの現状に對して「战斗的」に斗う彼らは、日帝が戦後在野体制の崩壊の中で行きづまりを開け、米帝の今下から離脱して新にな自立の展望を見出すためのエネルギーとして、プロレタリアートを动员しよりとする小アルジヨアジーの政治の最も「战斗的」な部分となつてゐるのである。スマーリニストとの分水嶺を「反帝斗争」の戦術に於ける相対的「战斗性」の面題としてしき設定し得ない彼らは、結局スターリニストの政治からのがれることができない。大衆が求めているのは、自己に敵対する「战斗性」ではなく、スターリニストに對して非妥協的に斗い得る指導部である。

や田インタナショナルは、七〇年の安保条約をめぐる斗争を、戦後体制そのものの打倒に向けての、プロレタリアートの政治的独立をなすとする斗争として組織するであろう。即ち、七百万の決起をもつて五十万の社民にも斗いの場を与えるし等々の言辞を弄する急進主義的中面主義を打ちする斗争を通じてそれをなすとつていくであろう。何と云れば、今年の秋なら冬にかけて準備されてゐる一連の「社民抗争」による「反帝斗争」こそ、先に述べたごとく小アルジヨアの政治的結果點、日帝の突破口として存在してしまふのである。

## 全学斗!!急進的中面主義の

スターリニストへの政治的屈服を許さず!

戦後体制解体に向つてプロレタリアートの政治的独立をかちとれ!

軸なだけ決して理解することができない。分裂の軸は人々のリニスト官僚と筋肉運動に於る杜民の流動化による「反戦派」育成の主張という一見「奇妙」な軸なだけ決して理解することができない。分裂の軸は人々のリニスト官僚によって強制されたものであることを直感したプロレタリアートの彼らに対する不信敵対の感情を利用することの中に自己の利益を見出す社会官僚の一部が、その手段として小アルジヨア急進主義者のスターリニスト官僚に対する主観的情態を利用しようとしているのである。